# 俳諧御傘 下

911
3

誹諧小傘

況

誹はいは雨中の雨天なりとて
詩のよ讀く物とぞ人に
とふや

雨二

さめ　只一誹とは小雨 急雨

あるとある急雨 村雨をといひて二

句あらし村雨とある人ぞう

も急雨とあらくも二ある

内るわ きうう 詩をよしむ

時る村乃字よきうし次

あり　只一誹とは二あるるわ

あまい雨乃かるを



鶯亭金升 藏書

春別分明に氣と合点ゆり
ぬ人にはあとはわくも詮迄
らましくやさ次とも智恵
あらんなさとわしら分ち
雨霧霜雪霰 如浪牠緋
には二句宛
去るわ

嵐 五年二句乃牠と次に
新式の銅なわ緋には嵐
三句をへし山帝の晴嵐な
と数よりひくも三句ゆへ内
なわ又嵐山を而の名なれ
面をうへく三句乃外にあらん
吹きけしきなとの銅を入
て風神にあらすくゆへ白
なりしも一座三句乃内成也

其所を打と正嵐風神の分
にあらす風乃字二句吹
乃字去乃着 縁 萩乃数
扇の風神乃詞にはとらし
も始ふ為うら次

鶉乃月 只一鶉乃字入とし
て鶉所の月今一
連に気なりし無にあり
緋には鶉乃字へくも二句可
有る雲一流鶉なりし今一句
と鶉と可有は外に月の時
殘分東雲乃月追出しの
種に結ぶ月なとの鶉乃字
と鶉乃字へさう月今一ゆへ
あるをいはまとも打と筆を
夕月同分

後夜（あきらむよ）　良夜（やい）　新夜なとゝ
詞をとりていふとも只一躰
なれハかくて殺されまいのとく今一ツを
寒ツ夜ふかく秋乃詞よかん
と殺すよふへからず夏ふ紀りけ有
それも新夜　終夜　肌寒（さむ）
なとの詞をとりて二ツニ入し
後乃月のさゆるとふもや夜ふ成
義ふくて寒よ別よ有るまじ後
後乃さゆるといふ句あるも後
乃月のさゆる冬季の当季を
知るべし後の詞なくてはさゆる
月とも寒月（えんげつ）とも成て後乃詞
のく月のさゆるといへぞさや
う成義なく後のさゆるか
可に有明乃事なとく後も寒き
氣色なよ月影乃寒さ
有りもそれ是也と寒き
こさも行（ゆき）絡まて夫季有相成
なれ秋乃さゆるといふ詞を
ては後乃月成て月さゆるとふ
あるへし次とふ月し

# 暁

只一夜暁一躰なりハ暁二夜
暁一躰と離てふ一三句
までも意てと殺すよふて意
三句乃内と暁も殺すなり
あくまて次夜も只暁を成すに
もあるうしも二句隔て成すに
とん路成す夕成すゑわ有事の
次（つぎ）よまり将を暁る也くハ
弥勒乃出世（げ）龍花下生なと
あるへしとす

に讃くも二句を組天鵞
天皇天目なるとの天には付
ていくるしかし次天人天下
なるとの皇の事といひたる天
乃字には皇皆二句を
あらはれし皇　春を霞りしは
れ踏要十六句　折と始浮地に
公夏根元　年中の事等に
くりし
曙　誹には一座二句あり曙雲
なると数にいひくも二句の
内を数かし釣時かにも成し
曙にもの〳〵のかのうなと二
句通し

釣日山　時かにきらはれ次
天象にきらはれ次
句稱にも所有し
芦　水鳥を捶拍を雛を芦炊
非二所迎一　数かし　非二捶拍一
種にあるを冬拍下萠なるとの
詞をいはまを捶拍水鳥に二
句を芦の種綿も好なり
芦田雨鶏　水鳥にも捶拍に
もあらず次句も
稱にも所を
芦鴨　所迎を冬を捶拍に
はあらず次も句稱に
よりて捶拍に二句を用あり田雨鶏
稱によりて捶拍に二句あり
あし田雨鶏　芦鴨　所道大

事の秘伝あり連よりやう
よいひかへく芦乃字一種よ
三句あり謝よいろと教よ
讀く今一句をへし法打を
習く以上四句乃抱し又かゝ
乃芦屋を別乃良なり也
連よ中務ハ謝ふも四乃かよ
面とかへ事今一句あるへき
ハ組芦乃字を抱抱よ用さう
句ゑらハ芦四のかよハ不可
有

温日与宗　日乃あくてう
といふ説とも
可為雲二句し新式ぬ説

春小縁　二句共し

春丹岩　春乃字岩の
字二句共し
組二句去よ務意し此詞
之の道乃大秘るゆかくたし
ゆふ志ら雑さ海よりゆゑ
を用く二句といへ家也
見えゐり

渋海　山海家海の紛貴
乃海文字連よ文句
なれを謝よ三句共し居乃
字よハ二句共し又道乃字
も切貴よあらき海中道
実和道家居具なしの
教よいふ時に付くもらし
うし寸組教よよ海をとも
切貴のたうの字なりとも

綱代乃座居にて二句し

明石（あかし）　類の名なれば名迄し
赤乃字に面と縁明の
字にはかりくきこゝろ次を
なれば石乃字を出ともいひ乃
字を略し無ゆゑと計いへし
耳にも無ゆゑ寸又名にて此名
なれば如も石乃四字しさ
雜とも無さ石乃ある不なし
に付ける名なれば石乃字
おりなし故に面にいひ出るわ
岩にはいと句を後にはこの句を
無し但以二道理をやりに可
嫌義なりしかれども石の字に
くひに字のこと稱を石の字に
計嫌く岩はいとい樣に

いと句を後にはこの句をいく可
然るわ而ありこゝ而ハ成寧鑿
ゝ雜譜しにくく成く座の
真をもてなれ之のこと明石を
思ふ迄にあらず次山類に

淺間（あさま）　山となけまとも山類
なり

縣石（あがたり）　表に正月十日除目
乃事に

鮎　夏に名鮎は表にさひ鮎
おち鮎は縁に鮎の字を
表に干鮎その鮎に雜るわ
連に二ありて筆にも雜りしを
書代りへ打とりへ三可有ことなり
鮎のもとの名に雜に鮎にて
打とまし

秋去夜　雅しセタの異るより
朗詠乃詩に去夜
曲浪をとあり是も成るし遠
乃ちらもセタ乃まし
扇（かふさ）　夜に納涼なり風雅に嫌と
云説は不用者のごとく風
によれ付合なりられも納涼
乃風なりは同意に成し扇は
夜の事を持によりて風雅に
嫌とを代中せ其扇は天徳を
そるへく天明其中せは風に同
意なり可風も又意に吹は
夜乃拘にあら吹可嫌無謂
天徳をそるへるもしと古
人知るれ其夜の系相すく
なれによりて夜の物なり

あらるれしも又扇を並ち
雅に但句雅と新式にあれ其
句雅を要とする宗道末代
に見るなれ詩論お見しき
乃並と云字さへ句中にあれ
も皆雅にもあらよれたり
又扇は一雅に何句の物と
云説は新式に見て吹なり
謝しは扇一かはなり一見扇
乃美名なり扇子天明なり
と聲にいひて又一以上打とも
無くとあるへし若かはなり
美名なりは扇二もあるべし
扇綱（おふさあミ）も二乃内に無制月
なとにあらしかり扇はしろく
海乃なり園乃よりも末ひろり

とかくしく今一句あるへし
茅の橋樓橋を夜も法樓にて法
湯卿樓にて人に超さ寺なりけり
ひ花表に樓橋なり法を家に同じ
茅の字樓にはいひ久しくわるに
一法にあるへし新式にこそさしめ
るなり上を橋にはあらず次切に用
よ事門のうちなり字なれを雖にて
は空句の橋と寸
樓(あさらか)小　釣乃字當て不嫌と
いへども新式に不廃(すき)歟
乃らしあれを二句嫌なるまきを
しからは其の字同おあしたの
うかにとらむ所しとる句にしは
あくり乃字にも可嫌よし遠
小沙法あり中に不及其とりの

なさ次とも釣乃字に二句嫌
上は可用樓一同云橋に花乃字
きこそぬに樓釣の字不廃歟
乃若乃の如何若云橋を花なり
なり時も一切の樓數をこそ名し
ていひ樓は笑ひあしたむに
向くのこと云名なれを二句嫌
もしむるわとしるへし
海士小舟泊瀬山　永乃字に
付く水邊
小可嫌にて新式にひなれを海士
小舟にてつり乃月と云花同も水
邊にて嫌也
東樓(あつまあさひ)　祚社にくまもなれは
祚祇にしなり海也

温（あたたか）

日のあたたかな所は可は為
まいらく形式りし如此のを
分れ只あたたかな所とらふ
たりは雑しと云んを無こ
物よあたたかと云詞はとし
るへく表よ所といへりを此
無理成物語し綿衾（ふくふすま）人のたる
へ欲物らひ物なるにあたたかの
事所と云詞は不断なれ所
を表りし定るもいはれを
形式は日の暖なりと云ふ
あたく能分分あれを世と乃
暖氣なりを表と定る物と
志れを大氣を風水世上野
山なとのあたたかなれ表たる
なし人は濃（かたら）寝（ひたる）蓮（ひしろ）塩中

湯泉肌手足
足袋ゆりけ
なとの温は雑しぬり面なりも
顕然なれ連りはともあたたも
さたり稀以人雑しは形式乃古法
可用志欲あたたむりも同お
酒をあたたむりは物し温なり
日とも常と二句を形式はん
打越をきらぬ面なり物の所は
温日は也常源は冷寒は
冷分は志むは寒ぬ此をは
昔はこれ似ろ氣の詞と
くとのこ打越をきらふとこ
ゆ今は温日は也常なりを
きらぬはあらず暑源冷分
あしむとき海し何ましも二句
去と連誹たは月ぬくなり

こそ同意にはハ侍ま源に署
ハ裏表乃同し壁ハ黒ハ
白表に置ハ長小短ハ乃新なり
但可依句体　くくさへかけら
も付くかけ侍へ侍へ侍へ
源に冷ハあらひくおり西　と
さ侍しなに意あれしむ
源しさの源成く別乃氣に
なりあれも同意にはなり
さるへしらく分別をへし只
武国乃名を海をわく末代
乃君子にはらもれ恐指
にあらしむ為なりもし
あるし　ぬし人倫なり
無之物ハぬしは
非人倫とかはり花を
あるし月をあるし人倫
ハあらす花を友月を
友同お花乃あるし月の友
依句体てぬ人倫花乃友月
乃友と云ハ花見月見の所の
友と云し人倫なりあるしに
其の字二句を云し

秋乃田　秋武に打越を嫌ふ
桃乃中に牧乃田ハ
くわ書く打越を嫌へと
治定しくとけりとを代桃
桃に不嫌とさくしく無之
なとハも非桃桃と書きたり
其心を推量も侍に秋武に
牧田乃も田に馬廉と加くハ
桃桃に一向不可嫌く廉返なと

出を天乃字乃きしひやう
なりわ若浦と数字は読句
あらを天乃字はハ不能雅
と云字なりハ嫌へなきわ名所
乃附を雅乃字とハ書へりし次
乃海 名所を國乃名にも
きし海 此所を海の海
いたも國名に國の名にも名
所にも雅にハ二句読ミ云
あそつ
粟津乃原 粟津の森粟津
乃里当水色なり
あら次 問云粟津と計ハ名
遺歟 答云句編名遺や又問
志れを大津も名遺歟 答云
同名津乃字海に付ハ名
又字なれを此ハ名云美濃
乃石津奥州乃金津なとハ
郡の名にしてもしかも海辺
にあらず称を名遺にきらを
さなし
あふさか
逢坂 山数を開も山にあまし
を山数を無言なりし
合逢と出なりし逢乃字に
二句去と付わ 此分なきなり
に熟熊王乃字に此所にあらず
為あひたる名にあらず逢坂と云と
日出紀にあれを名の字なりハ二句
去なり合逢の二字にハ三句
去へなし
あそこ
嶮乃葉 りし他乃んしきの葉
とりひろ所なに木の
字に二句嫌るなり

まてあつさあらひ木の下ふ
よ二句きこえあつさひまの冷くと
こ句ハ字もいもおちれていふる
とききし海くん定むる魚る次

海士 人海之為通たり

白馬乃節会（あをうま せちゑ） 正月七日

鶺鴒（あきたり）里 鶺鴒ハ巣を懸し みかまるれ

汗 無官秋よ夏の季よおせわ
新式とハもきす汗ハ夏
よりきうす痛すも又能とり
きくもおりる又梅をもらくも
あらずをしくも湯茶あく
もきまよ人皆暑き折梅なより
或説よ汗と計ハ雑なり汗か
きと云れて夏とやき続し
今日人ともも多く残すれ
熱お病のいわる暑の外さ
寒とさく冷ま气を傷寒と
云痛とみて寒をとらんしく云
おこるとのへり寒さあらハ来りし
出人も表起る温病といひ夏
も頻も名ハうちれくも史熱
痛者皆傷寒と春向ふおわれ
とくさるをと定めうし霍乱と
夏ろうけきしも地乃春ふ不もこ
ありえうれと気病中暑あと
乃外ハ冬よるうす暑病の外
る熱乱といひくも夏にたる
龟ぅ次毛木さん夏よとうさ

謝諸仲傘

右

又月毎一　梅乃毎一一座二句
乃梅うしおせの事

謝よい又月毎一さ月乃毎と
りさしてる梅乃毎とり今一代
かよ梅乃毎とりまいうとり
数よいひくいと三句も見
まあるさしてる梅とゆ宮
さ月毎とゆもるりき詞よ
て耳よしあらはしいよ
懐紙をうへくも安ふくる
為き歌但又月毎二あらん
上乃句下れ句に作りり句

と一お繻にあるへなりそれお
利を清まつくらさいあるへから
寸前さひとき詞をざれと
き詞なるにより柏さひ神さ
ひのかに又あるへきなれとも
基俊(きしゅん)の言にさひしなるまし
にもよ海まこゆれを気もこ
句乃内脇無しさひし歳
清まつくに悪を付ましいたれ
を悪を柏をおりへをさひ
しりしさ海柏とくを代
そしつ重言を抜なるとにも
を義を抜まし待る気
誤し言の合にまゆ清あり
しを俊脇ていたれぬまし
と利しあひしに家長白

なるにはいは見ありひを元学
乃人今業と見えあり信見
もへからひ太刀刀水乃さひ
さひ鮎なりしは各別乃まなれ
を付くもく海しりしひ
楊 只一連楊山楊なるとし一
紅葉に一連楊山楊なら
て只楊と二あわくもくらし
ならひ謝りしは此外に楊の字
一あわくいと思し
歳(ひさ)楊 美し柏を居ぬし
いぬ楊 美し柏を気は楊に
いたる来にくに花もさ
す又さけ花ちいさなる花に
ていやしなるまにとそこ知るを

大藥酒にもくるましくさ
みにゆりん大樽なとく海と
乃樽乃屋うに用ひまてり
誤り覚(おぼつ)来なし組後類の
方に山陰(やまかけ)に屋せさらがへる
大樽返て形されて引人も返し
如じあまりて誹言にはあらさ
るへかれ連(まんか)方に後に雪のさる
樽なれは誹云に成面し

樽人、樽田可は内種物新式如
じ樽人を諷物の名し
無く新式の定のことなら
ま表の書紙は持たる絵にある
書末に准しく種籠にはあら
さ所無なとじ樽人樽田と種
籠なりと記せり子細ありと知し

不審なり其謝にはまた分り
まへし云云樽には種籠り
二句とあまた既に新式に
種籠なりと記せりとは余の
催馬(さいばら)糸とうたわく種籠り
三句表にも成へなし云云樽に
はこひ方のく名に落ちて
人倫にあらすとう言わ新式
乃種籠なりと人を分とは人倫
にも嫌へなしじ樽人樽田に付
ては種々の云と侍まてわさ
と家にのを次

樽田 表しくなりなし種籠と田りしは
家去なり

樽町中納言樽乃馬場樽の家

か梅もまてうくなるにより二
句とは定るなり梅間を
考て漂ひたさ名取るれを
いう成因縁にて付ろ義を
不知風土花をかんさろあるを
残る所ろ梅井因なる又問梅
乃宮ゆゆ若も八筆腐の
末社乃名に宮く梅ハとひ
梅ろう傳ことあそたはまつ
神木をあらめくに名成へし
小盤庄に同結無し

梅かさる　表に

寒さむなし　冬にさゆるも同し連り
さむなとさゆるとこ云者く
二句あり冬の事に排りしを
ばかりよりんと鼓よいひく今
一あり志りれを冬にさむなし
さゆるりんと以て三にさむなし
さ整るりんは三の物いひ人
こゆも同事ゆゆ同し杉にを
為ろう次いひ無ぬ事ハ他
乃事ハ裏にあるにたとへハ
表さむなとこ云句のある裏
にハ表乃さゆるに表に
不可有林冬のさゆるを
可有りんの字同なる姫さむ
なとこ云裏りハ他乃事にく
もさむなとハ不可有表ゆゆ
寒海又表りんなとくあるに
冬さむなとこ云句の裏にハ
冬のさゆるりんのうちなとく

新式乃旨を見んそこるひて
新式以後乃連謝のさいなる
屋うし丸うと業右あ乃
字乃新乃あてくう新うと云
詞乃下よくりしく注せ
藤乃庵（いお） 椎柄よあら次元ハ
藤を切くふくなる
居ゝかし
さく枕 椎柄なるり新ふなり
旅りしあら次
さくめ 藤よ沙ろ菓なり
藤乃字よ三句
藤と志乃 同面を嫌へし
新式かくのことく
謝りハ七句志へなこしもとくも
同し柄と山伏乃袈裟（けさ）ゆん

もとゝかけも藤乃字を云ふ
志ゝまてはひ三文同神吳名
なり行と文句去なれは謝
りハ三句云ふ屋去しく行
さく行なとあらはれ行よ文句
去へし同云さく志の　さく
小程よ行句あるへさそや
善云新式よいら同と云さく
なけまた志のとさくと同し
面を嫌と載るあれは　さく云ん
志のもわよ一法あり柄とこえ
ゝあり志ゝうゝ謝よハ面よ
一法あり云ゝ志のと　さく
との局のきくひ屋うハ七句
志へなこし又さく云耳よ云
柄なれは謝りもさくと一

まくの志のや袈裟乃名乃
まくらをなといひかへく三句
まへなし頼もさくと志の
よの為ハ七句去へし此三句
誹りハ本にも草にも二句
去るなり

さくら　藤よハ二句嫌志のまく
竹よハきらひ来たし
非樵柄尺蠖と又骨屋のき
清りく川の柄をあらふさく
雅ハ軟蠖よハるゝ次海ことの
さくらゐくく今一あるなし
毛もさくよハ二句可嫌志の
まく竹ホよハきらひかたし
組竹の雅なれを付句ハさく
[illegible]

里神木　神祇も動かし非居
所里の字ホハ三句
去之一説ハ雅の字ハ一説なり
居所ハ二句去ひ二説ありつ
り好し此居所云柄の間り新
武用毛あるよハその為を守
雅の重なし二句去乃説不用
之

催馬楽木名の草木　非樵
柄されたる其草木にしらく
重ね紙とつこゝ毎へし梅かん
うとふ　書柳うたふ乃新書
よるれとも樵柄よハるゝ次以
寔思寔ハ楊人うとふ非樵柄
人君字人編よるゝ次以催

馬系より給らす一切の葉 楓
乃名の葉末は梅花にはあら
次雪紙を持て 鶯子規に
乃誌鳥生類皆雪紙は梅
高生類にはあらず次問云 鶯
雅を催馬系の伊勢ゆん 海
難波津の家水鳥にあらしたる
歌 答云新式に葉末の雪をを
を持て 梅花にあらぬ事
綸より葉末に唯うと
を上を伊勢の海とあり
を為迦にはあらしすと
知へし但神系にはいたりくは
きわくをとうとふとあり其
類にもあらず次生類にもあら
を名にしるなし一切乃神系は

皆名の事なるなし故とも云
夜神系を夜河鳥にくすを
を夜之為迦にもなし如此
指合乃くりやう濱の真砂
乃おとくなれを新式にも只
大網をあけく網目を志る
さ次末代乃家通無智無学
にしくは無非に海とふるなり
ものし

佐保姫の衣 非衣類 新式に
如此載たるには
衣類にあらさ御面し知る
にさ姫を名前にきとふと
云説を連家にはいひおしたる
を無非乃讀讀もろ人なけ
也を回舎にもそれなしなる

かく其嫌なけまでも姫と
云うり嫌のあるやうに句を
縦里まく衣といふのよりも續た
実祈なき所に衣類にさへきら
もぬ相をなんそ名所なり
きらぬ為なるや此り愚成心に
さへ誤と存る智恵あらん
人を定て後生に知りへ
なるとこそ思ひ仰せ佐保と
言を佐保の山姫と云義を
正説とそんをしるべくり表ゆん
神をさりて云いと義あるべく
之口傳ぶにまたべく

さ歌（よ）　さ歌しり鳥に小松
小藤の小字付句と
きし歌和紙不論べく

さ歌べく　連に不句謝に三句
をとく同前とし
かへ男の字をさにもをにも不
塩さ歌しりも男鹿なりさの
字こそ小乃字なるれをの字ハ
小の字にあらず決

鷺（さき）　非二水鳥一雜之鷺なるべく
白鷺と数に讀べく又あり
面し和歌に志らる鳥とよりあり
も鷺なれを打と書く又
あるへし謝にてしく鳥と云句
ハ志らる鳥に名所なるれを白鳥
字に七句去へしまた書鷺
又佐鷺鳥志らさなる打を
可去かさらなるハ鳥のもしる
まして鷺に三句可去紙源

氏の字治の書にはしつさなり
をかさらなりとも書もあまして
可依句体なり

蘆（さらぬ）乃ひかわ なると月よよ
ゑへ無らハ月
よ二句可嫌ゆへ然れ萬秋
ゆへ新式見ゆへ面の月と
持し乗ゆへ天蓋ゆへ二句も
酒三乃門なり

坂二 今一名所にありとさり
非山類名別の拘なれ
付くもくるしからんをその
坂山類ゆへ述懐なり
左去坂三乃門なり但冊波
乃むの坂ゆへ山類ゆへ非述懐
多年の坂も山類にあらず

述懐ゆへあらず次といへども坂
三乃門ゆへ去の坂同ゆへ去乃
季を持し

櫻乃宮 風乃文伊勢の末社
なり名所にあらず次

咲 と云字連に四ありと
中せハ雛にハ又ゆへしそ
まも木草のむ乃名を書く
ある事ゆへ正むにハ二句ゆへり
雅を花の咲に門戸（ゆへ）とひら
くあるの開の字ハ二句ゆへ
まゆへハむのゆへと云時ハ多数の
字咲乃字開の字なるを云
なるむのひらなると云時ハ門
戸状文ゆへ乃開とハ面を嫌へな
欲ひらなると云詞を拘なれハ

さきあくしあれ

但他と出れし

さい　なと云詞百韻に二句計
ある人しと無き物に行り
気は上人来くちかひ詩歌文に
耳にも云詞にもあらず次いとも
かくもせくはかりなぬてにを
いの詞を連にはいとも海道雅に
は二句去にはとへなかわ

さらの字　あとさらは故乃
字を出れり詩
字にも文の字にも二句嫌と
いひ事の字には不通然気
も付句ならわは嫌へき歌詩文
と云詞何なわ其いひてて其
中に別しくぬきあくかたり
ちまり錦ておとさらと續
字にくはなけ事とも唐れ文
章の内に屋たらけ事詞を
付る時所にはわくかなりゆへ其
じゆへともおかくなりんな
を付ける計しあるまてとの
字なる文の字にも文の字り
も詩の字にしも文法なも
さらなのかたりあれとも
心は通故なわ

海道　長されば雅さ道冬され
夕さ稽気たりにく夜
さ稽鈎海道と云事は旁にも
あるへから須気は口傳の詞に
て出あらず事なら只云
なれは秋なまはと云詞とゆえ

よく前書の経よりたんなとも
出なり稱しるわ題前の前出
乃経ゆゑ詩ひ大力とく其
実の義をハあらはさぬ法
なわ色をあらはせハ有後
く明りこゝ明るなよりの
あとしと人道を秘するよ
あら寸秘しく法こんかり
こゝ明りとハかやうの事を
秘の執心あらは卵流を更
殺る人我を見なり他乃道を
不知ひ道なりハ自見なら
ぬ事也

さゝ人多次神　蝿のことく悪
神の多なを言
夜るの神祇なり



さひ鮎　あらあゆ皆鮎なり

殘菓の宴　十月又日より
室湯のこと
く詩絶酒宴あり

我

蚕　秋も　誹二八二句をへし蟋蟀
と漢よりひかへくも三の門な
ゑへし紐連欲よ蚕一の外よ
きりくもとうたふと神系の名
とと一句を後とあまつて誹ハ
蟋蟀とかよ三句をへしあり又
筆川出させてふ虫るときりく
次の吳名ハもこの門也

きのふ　只一時のふと云く
字にもいふ一ゆゑ謂
よいきのふ一ゆゑ謂
と又一あるへし時の
あらはさく日と数よも不て
肖さく日計も同し

昭日の種　かふのり称たに
晩鐘に入れり
打を編ふまつかたわ名前に
成也

碪　只一謂には椿(たうい)衣と一名也
おの碪乃句に書数鄉書
打なと云字結ひ書ふ反
乃句にいと字を結ふ書ふ次
椿衣と云数よ海をして
衣うつとも碪の所にあるも

碪に衣数二句きらぬ
の字にいと三句さ所有し板の
字に又句編と云字板にて
碪といふ衣ぬの板と云心ゆく
付ふ名りと云へりさにいあら
をきぬたゝかと申下略
乃詞も板にあらさ所鎧拠を
きぬさの字には石篇に書も
さ所にしわ商流には板を付
てもらるしこの次

きぬく　悉も動かなり不連
のりへ詞も形式り
非ニ衣数抱乃而にかしく
小書にあるもの字にいれ打
越を下に編りとのへり結るを
正代ら連に衣数に二句編

不可言こさぬくは別のうへ
詞なるにより絶の暁の文
字より若衣の上に花の蔵
ころを文風のよ所へちらせる
をよこのひゝあまはそのあ
は歌ふなまことむのきぬく
と云詞一てさゝぬるを相むはそ
むの蔵を連謝に暁ゆんん
なくこゝあるをは歌ふ
といひくしを法のき蔵
川乃百首にありそれをこ
給ひゝあらは合点あるべし
蔵（きし）一名所に一段蔵（りのきし）一謝にハ
只乃蔵二名流に一段蔵
一ゝ上ゝ置なり ひかんとあらは
皮さしたる俗の蔵とも

あるへからす乃蔵は尺蔵の
蔵なれは名也にあらす又
表状に二度あるなに雑も
むりんをは時正と申なり
歌昼の長さ同しさなしひ
りんと時正とは物を嫌し時正
には蔵の字付くも不苦
木あり里 樵（せう）夫（ふ）と出ゆへり
木の字に二句去
人編なり
木と木 三句去しきとこと
続りたりく一方種
柏にあらすは二句去なり木と
草二句去し
木紙きり あらさしくも種
柏にあらず

木に燒木　薪の字を書
なり二句去し
薪に木ちわも二句去し
木に几帳（きちやう）　二句去と云ふ
辭事（ひらこと）に几帳
と出なるなり木の字をとく
ちゝ草子物語にかんる書
とく文字乃敷文をかわく
筆ふん乃出よ紀字なれ
何ふんなく書よわ出なるら
たしこる計に木の字乃
ふんなれなり
木當　木の字二句去改（きそ）沮
た出なし
木當路　山類にあらず
木當とたらわ

山類に木當路ゝ木當へ
ゆゝ道ハ茶乃囲よわも法く
さくあるなに山類をのゝ
ふしそれも木當の山路な
といたく木當山乃中にあら
なるれを山類に此准ふく
清（きよ）ん（こ）ち（ろう）　所迄に清ん寅
同なり
きし一　きゝ寸一杓をゝ
野鶴一以上云し
皆書にかけたの雉子ハ冬に
敷ノ鳴書紙ゝ此法なるとも同
入ち書に書ハよひに雉子
のなく前を中の並未明に
ゆゝさくとる紙鳴鳥鶴た
中みさん鳥た鶴鷲かけたこと

うまたのこうと計いへとも
雑子の事なるわ雑三の外
なるうらわをはかる西面し

**桐** 秋之初緑にちる紅なるわ
連りしさのこゝてあつかは
然相あく一座に二句あり懐
要をいふ事をかまとも
謝にはおもく用ふるものを
故乃桐一ゑく梧桐とわを
かへく又一ゑへし以外にし
きわ清かさわ風つ相火
桐 桐乃若木の緑にもなら
寸極相にもなるさ清桐わ
をかへくと一ゑへし以上三句
の相と知面し紅桐つかきり
り屋川は雑にはれとも極相に

は二句去之

**小祭** 冬之初の後の時春
祭なり霜月下酉の
日なり寛平元年にはしまる

**狐** 只一謝にはきつと計も
こゝ祢きつに野狐小狐の大分
狐女 野干 稲荷 家婦に
乃わをかへく今一ゑへし狐
川は狐乃字にあらはといい
面りしまつも付くもくらし
ゆゑ面りしとよくくゑつ然
面し

**君不と君沼** 三句去之

**君** 人倫之悪之依句雑大
意なりしも非人倫大悪

霧乃籬（まがき）　浮柏　蓬柏　居
　　所以清まも二句
　　去之垣には同面をきらぬ

霧局と一　ありて又霧のひ
　　海をとくあるべし
　　鄰には霧局と二ありて霧の
　　ひまとと一以上三なり

霧の香といふ香　霧に匂ひ
　　のある柏之
　　婦り柏之婦り柏にも婦霧の
　　りといひて別に無さを此あ
　　るにあらず次霧不動さん
　　香紙を無きと詩にも絶つる
　　只秋の霧の事也

きぬらぬ　月次の月二句
　　婦人し　泳生

にも同おなじ　無きは月次の
月と云ハむ月　さ月　文月
なとゝ云月の事也月日の
たやく蓋く物と云も月
次の月なわさやうの月此字
には付くもくるしこのし次
無きの出やうあらぬる局
清文字の処に書ゐれとも
又實に志るし侍ら

きさらぬ　衣二句きらぬ
　　ゐ　　し

きさ文字　志らさわき　いたさ
　　つまぶ文の類なり二句
　　去之をきぶ文にをさ　深さ　濃さ
　　なとのきさ文字付くもくる
　　しこのし次おそひきやるん

と云きや乃詞謝ハ一座ニ二
あり並而をくへくさへし
曲水宴（きくすい）　三月三日ニ行之
祇園會　六月七日なり
乞巧奠（きこうでん）　七夕をまつるなと
なり
小野參　八月四日なり
こさわ原の駒　絵流の名ニ
秋なり
こさゑくりり　冬も衣服なり正
月の小袖を郊先
りしくりる事

趣

夕薯　只一謝ハ夕薯と
と一ちへし数ニ續て
夕陽薄薯ニも二句の内なり
夕薯ニ杉を可縫歟　黄昏（たそがれ）
晩菜（ばんさい）　夕薯ニ同しかなり
文字別なれ二句の外ニさま
ともタ薯とタ方薯とハ面を
不縫之文タ方薯の海の[illegible]
字なれ乃字　云の字ハ
不縫
夕薯と云ニ　明なのなと付く
いく所しかく次
打越ニハあしく打越を縫と
二句去と同し事の内ニ縫ハ

よりくうちりめありとハ乞ホ
の数なり

## 夕アー

連ニ二謝ハ三あるなり
夕とちりたれ一法く
あきたる一座四句抱え謝ハせさ
と数ハ續句お縁おしく又句
乃抱え夕アハ連ニもタの字乃
裏ハ何きたる謝ハ夕とタアと
ハ七句去え夕とタと面を留し
夕アとタアとハ打え夕と夕
アと和合連ハ以上六あり謝
ハ八宵なり数ハ續く二句
三句あらハよりに續ゆへの字
夕アの字を面ら可面し数ハ
續くも續ハよりしくも和合
一座ハ八ありと云ハ紀夕と夕とハ
面なと續ゆへ夕アハ声ハよりも
せさの字ハ皆七句面ら何と
知へし夕字ハ蓄晩ニ来た
そうれなと皆三句去之名云
大蓄とて去焼乃くるし
紫蓄むの蓄なとハ二句嫌之

## 夕立

夜之兵一夕時ハ
寸兵夜の名なれと夕の
字ハ乃字ハ三句ハ去
蓄の字ハ二句嫌と云ハ
し但謝ハ夕ハ雲夕ハ
風なとく今一句打をかへく
あるとき時ハ夕の字八の内
ハいりくり時ハ夕ハ
蓄ニ三句嫌釣時ハ打越を
嫌嫌り抱ニも二句白雨と云ハ
天海東 由己法橋 山谷ハ詩
ハあると中さ稱しかハ丸ハ執

月新なると連よも二あまハ排
すハ句体をうへ三ちへしたる
そうまゝ入れるゆゑ皆夕の所なし
いまきも物をうゆ無し

夕月夜　夜の字ハあまことも非
夜ゆゑ夕の月也

夕清ひ　元ハ入日の事なり
月の字にあらず
されたる夕月夜と見まさらう
次無りし寸ひ新地なり正説
なるあ文字の所よくうしなる
記さく

夕清く　辰星と云星の名なり
天氣し黄ハ夜なりなる
とハ雑し星にハ面を可嫌月
と日にハ二句なり

夕ゆ山　名所にあらず夕
夕の端山なり

夕ゆ川　肥後乃名所なるなり
よ蓋の字よ不嫌
組句解よ字無し

夕ゆ　夜も蓋の字に不嫌
無言抄よハ二句嫌と
ありあやまりしおもひ
付くもくるしおもひ
時ゆよ仕立ちあり寸ゆ夕
約時ゆにもゆ夕時ゆにも或
雑ゆ無し夕の字八の字も
夕の字よ三句組句体なり
よ字無し夕良の実ハ秋も
瓢簞とハ物をうゆ無し
趣ゆ瓢とうわし簞

せんと教のよしくも此と又
句まへし新式よひ雪まん
穿鑿（せんさく）まと中比と当世と
説くゝ不同なくむつかしき
為知やまもなく屋うに誹りしは
正理を変に出付侍りなせ
柏の雪とハ花乃雪波の雪
頭の雪なるわ乱ハ又句乃
外にまたは新式よも此物
乃雪ハ各別乃なるわとこゝ
海ことの雪に誹りしハ七句去
屋しゆに秋（ひむ）室面を嫌え
永辺之納楽し
富士の雪連に近年雪の
雪のとく清を去とし物
雪ことを各ことを侍ハを代の

家道万葉の方を知るから
和方不和侍なに万葉集を
あらぬ次先を連をあるとゝふ
あさ海しさ義も誹にも万
葉の方を用ゝく富士の雪
を雑なり清も物雪も皆
変にまた侍なれ富士の称に
嫌り清む雪ハ六月の望乃
日きえくこと歌嫌るわと
侍り上ハ今こ侍人まん同なし
和遠まり先上代の方を用う
此道の本意なり既に延喜
乃法も富士の煙ハ無くきれ
ともあるりハ煙乃無んやうに
よむと古今の序に侍し才や
世間五事沙汰の批判（ひたん）りさへ

古今を繼跡にせし事なり
海しく連綿に万葉の字を
不自事あるへきや家紙家
長時ふに八蜀士の書を雜に
せら稱しとを代赤人の田子
乃浦の字を行古今の冬乃
部に入ぬ事も定まれ澄
の時万葉の字をハ不被用
と雅量しく冬にあらさめ
定しとハ和字稱ふの心持
を不知故歟志らむかるにそ
と人ゆゑとひしとなる事と答
て我ゑ字海しものを業
平のよめ家を伊勢物語り
見たや一日よくひくなりと
二条后を死人と思ひく

よめ御座りまゝ辛ゆりとこそ
殊勝なれたとく行古今の
長傷の部に入らはひ集を
連歌の去嫌乃繼とるさは
ひ字も長傷の字なら慈
の部に入さ稱も慈の字り
あらはといはんや尚稱この
習ひ雅集にはある事と
取り行ひ行古今の部を
作しく万葉の皇の日家
えくその歌ぬるなりとた
しく續ふ字を廣云に
主人家乃理もいさゝかあり
無しく次謝に宗祇家長れ見
ち紙作しく清と物書ハ交
わし只蜀士乃書ハ雜りす

# 龍鍋法傘

## 巻九

### 名神

非名沼新式如此あ
家をもしめしへは去日
乃神経者乃神なるとは
名沼にあらず候と云事なり
其名を紫良の家にたりさ
祢ともいはくの歌にてえ
勅請ゆゑ法名を生嶋とき
去日大明神とはいふ名和
にはあらず只神の法名になる
と云事あくあくまゝ行
とも代ち義とも見まへをし
て名和にならずと云なりさ

あらそ何を名神と云そ如く
さへも住吉をハ上洛をそこ
洛を取と云紙中と書る神
何り毛たさ取りあやまりも
應洛をなとし云を非名流と
云義あらへし次連よハ云
あまと謝よハ神乃洛名を名流
よハきてしを尚ましさるす所
要なり但しそれも社とも
神垣とか云ぬとか云句なら
そ名所よきしぬ屋なるり
句神よりすしく名所かし
所と云もるしぬと云も皆云
理しとりく式同乃こそ
神の矣名をいふよあらす
美日住吉山野なと名流乃

名をハさ雅又とも神の洛名
成有てし名所よあらぬと
定てる種しおそれ物なり
るするうちぬとへも山賤とハ
山乃字ハありなら後ゆん
分の名よるれも山類よきる
そぬ屋しの事成屋し

和布（めの） 雜之名和布ハ表し
め紙なるハ度し

名所とく 謝よハ二句去

名所の表日小 表乃字日
の字付く
もくるしく寸と新式よ
あまは一切乃同字別吟を
嫌ふ屋りし但幾日乃り文

あらかなりには不嫌と侍り
には面をきらふ物也但折
ともきらふ物なるべし然れ
と侍り耳によりて侍りな
まへて嫌には一座に二あるべし

凡

# 御

不可山為非季新式にいはく
このこあはく庭の浪法
なし葛も御乃池御乃雲な
と云句あまりて庭のやうに
おもひなる次人あるによりて
不可為非季とて猶嫌
山水御池の御関の御宿の
御は只ちらぬものなりと云
詞なるを新式以後の定

庭乃替詞のやうに小はかり
と古人仰用しらる新式
をさだむる時非季にて二句去を
な次りを時ありおもひなり
云字の類にもなき御と定
之に非季又庭の替詞に
ありて次連に一あまりて嫌ふ
二あるへし非季にも庭に
も嫌ふ庭らし次硯下巴房
なる詩にも能を游御せ
字稀に嫌はるは庭のやうにも
おもひ稀とあらしに庭の
文字と云本文なけれは新式
にも見ぬ説をも用る杼を
去りて豊なるといふ御より
庭によるの杷なれは付るも

濛 ろわ 呉一名雨ノ細キヲ一雰ト云ヒ二雰ヲ一霧ト云ヒ霧ハ雨ノ濃キヲ
いと乃 ヒ霧ハ雨ノ細キヲ云ヒ霧ハ雨ノ濃キヲ云フ
霧 名義抄霧ハ雨ノ多キヲ云フ
霏 中略霏ハ雨ノ多キヲ云フ
霈 霈ハ雨ノ二雰ヨリ多キヲ云フ
霶 霶ハ雨ノ霈ヨリ多キヲ云フ
霢霂 霢霂ハ雨ノ小キヲ云フ
霖 霖ハ雨ノ三日已上降ルヲ云フ
霽 霽ハ雨ノ晴ルヽヲ云フ
霾 霾ハ風ノ雨ヲ挟ムヲ云フ
霰 霰ハ雪ノ凝テ雨ト成ルヲ云フ
雪 雪ハ雨ノ凝テ雪ト成ルヲ云フ
霜 霜ハ雨ノ凝テ霜ト成ルヲ云フ
雹 雹ハ雨ノ凝テ雹ト成ルヲ云フ
雷 雷ハ陰陽ノ相薄ルヲ云フ
霆 霆ハ雷ノ震ヲ云フ
電 電ハ陰陽ノ激スルヲ云フ
虹 虹ハ陰陽ノ交ルヲ云フ
霓 霓ハ虹ノ雌ヲ云フ
雲 雲ハ山川ノ気ノ天ニ升テ雨ト成ルヲ云フ
霞 霞ハ雲ノ赤キヲ云フ
霧 霧ハ雲ノ黒キヲ云フ
霄 霄ハ雲ノ小キヲ云フ
雰 雰ハ雲ノ気ヲ云フ
霊 霊ハ雲ノ美ヲ云フ
霊雨 霊雨ハ雲ノ雨ヲ云フ
霊雲 霊雲ハ雲ノ雲ヲ云フ
霊風 霊風ハ雲ノ風ヲ云フ
霊雪 霊雪ハ雲ノ雪ヲ云フ
霊霜 霊霜ハ雲ノ霜ヲ云フ
霊雹 霊雹ハ雲ノ雹ヲ云フ
霊雷 霊雷ハ雲ノ雷ヲ云フ
霊電 霊電ハ雲ノ電ヲ云フ
霊虹 霊虹ハ雲ノ虹ヲ云フ
霊霓 霊霓ハ雲ノ霓ヲ云フ
霊霞 霊霞ハ雲ノ霞ヲ云フ
霊霧 霊霧ハ雲ノ霧ヲ云フ
霊霄 霊霄ハ雲ノ霄ヲ云フ
霊雰 霊雰ハ雲ノ雰ヲ云フ
霊霊 霊霊ハ雲ノ霊ヲ云フ



名の称 麗 名ノ称ヲ麗ト云ヒ名ノ称ヲ別
くの相 くノ相ヲ別ト云ヒ別ノ相ヲ離ト云フ
或は不 或ハ不ノ字ヲ用ヒ或ハ非ノ字ヲ用ヒ
ろう 或ハ無ノ字ヲ用ヒ或ハ莫ノ字ヲ用ヒ或ハ勿ノ字ヲ用ヒ或ハ毋ノ字ヲ用ヒ或ハ靡ノ字ヲ用ヒ或ハ罔ノ字ヲ用ヒ或ハ微ノ字ヲ用ヒ或ハ蔑ノ字ヲ用ヒ或ハ亡ノ字ヲ用ヒ或ハ没ノ字ヲ用ヒ或ハ尽ノ字ヲ用ヒ或ハ滅ノ字ヲ用ヒ或ハ死ノ字ヲ用ヒ或ハ喪ノ字ヲ用ヒ或ハ失ノ字ヲ用ヒ或ハ遺ノ字ヲ用ヒ或ハ忘ノ字ヲ用ヒ或ハ乏ノ字ヲ用ヒ或ハ闕ノ字ヲ用ヒ或ハ欠ノ字ヲ用ヒ或ハ虚ノ字ヲ用ヒ或ハ空ノ字ヲ用ヒ或ハ窮ノ字ヲ用ヒ或ハ困ノ字ヲ用ヒ或ハ貧ノ字ヲ用ヒ或ハ寡ノ字ヲ用ヒ或ハ孤ノ字ヲ用ヒ或ハ独ノ字ヲ用ヒ或ハ単ノ字ヲ用ヒ或ハ鰥ノ字ヲ用ヒ或ハ寂ノ字ヲ用ヒ或ハ寥ノ字ヲ用ヒ或ハ廓ノ字ヲ用ヒ或ハ清ノ字ヲ用ヒ或ハ浄ノ字ヲ用ヒ或ハ閑ノ字ヲ用ヒ或ハ静ノ字ヲ用ヒ或ハ安ノ字ヲ用ヒ或ハ楽ノ字ヲ用ヒ或ハ休ノ字ヲ用ヒ或ハ息ノ字ヲ用ヒ或ハ止ノ字ヲ用ヒ或ハ已ノ字ヲ用ヒ或ハ罷ノ字ヲ用ヒ或ハ廃ノ字ヲ用ヒ或ハ絶ノ字ヲ用ヒ或ハ断ノ字ヲ用ヒ或ハ離ノ字ヲ用ヒ或ハ別ノ字ヲ用ヒ或ハ違ノ字ヲ用ヒ或ハ去ノ字ヲ用ヒ或ハ遠ノ字ヲ用ヒ或ハ疎ノ字ヲ用ヒ或ハ隔ノ字ヲ用ヒ或ハ間ノ字ヲ用ヒ或ハ隙ノ字ヲ用ヒ或ハ乖ノ字ヲ用ヒ或ハ背ノ字ヲ用ヒ或ハ反ノ字ヲ用ヒ或ハ違ノ字ヲ用ヒ或ハ逆ノ字ヲ用ヒ或ハ戻ノ字ヲ用ヒ或ハ悖ノ字ヲ用ヒ或ハ乱ノ字ヲ用ヒ或ハ惑ノ字ヲ用ヒ或ハ迷ノ字ヲ用ヒ或ハ昏ノ字ヲ用ヒ或ハ暗ノ字ヲ用ヒ或ハ冥ノ字ヲ用ヒ或ハ晦ノ字ヲ用ヒ或ハ闇ノ字ヲ用ヒ或ハ黒ノ字ヲ用ヒ或ハ漆ノ字ヲ用ヒ或ハ墨ノ字ヲ用ヒ或ハ玄ノ字ヲ用ヒ或ハ幽ノ字ヲ用ヒ或ハ深ノ字ヲ用ヒ或ハ遠ノ字ヲ用ヒ或ハ奥ノ字ヲ用ヒ或ハ隠ノ字ヲ用ヒ或ハ秘ノ字ヲ用ヒ或ハ密ノ字ヲ用ヒ或ハ微ノ字ヲ用ヒ或ハ妙ノ字ヲ用ヒ或ハ神ノ字ヲ用ヒ或ハ霊ノ字ヲ用ヒ或ハ鬼ノ字ヲ用ヒ或ハ魔ノ字ヲ用ヒ或ハ仏ノ字ヲ用ヒ或ハ聖ノ字ヲ用ヒ或ハ賢ノ字ヲ用ヒ或ハ善ノ字ヲ用ヒ或ハ吉ノ字ヲ用ヒ或ハ福ノ字ヲ用ヒ或ハ祥ノ字ヲ用ヒ或ハ瑞ノ字ヲ用ヒ或ハ慶ノ字ヲ用ヒ或ハ賀ノ字ヲ用ヒ或ハ美ノ字ヲ用ヒ或ハ好ノ字ヲ用ヒ或ハ良ノ字ヲ用ヒ或ハ嘉ノ字ヲ用ヒ或ハ令ノ字ヲ用ヒ或ハ善ノ字ヲ用ヒ或ハ淑ノ字ヲ用ヒ或ハ貞ノ字ヲ用ヒ或ハ正ノ字ヲ用ヒ或ハ直ノ字ヲ用ヒ或ハ誠ノ字ヲ用ヒ或ハ信ノ字ヲ用ヒ或ハ義ノ字ヲ用ヒ或ハ礼ノ字ヲ用ヒ或ハ智ノ字ヲ用ヒ或ハ仁ノ字ヲ用ヒ或ハ忠ノ字ヲ用ヒ或ハ孝ノ字ヲ用ヒ或ハ悌ノ字ヲ用ヒ或ハ順ノ字ヲ用ヒ或ハ和ノ字ヲ用ヒ或ハ睦ノ字ヲ用ヒ或ハ親ノ字ヲ用ヒ或ハ愛ノ字ヲ用ヒ或ハ慈ノ字ヲ用ヒ或ハ恵ノ字ヲ用ヒ或ハ憐ノ字ヲ用ヒ或ハ哀ノ字ヲ用ヒ或ハ悲ノ字ヲ用ヒ或ハ憂ノ字ヲ用ヒ或ハ愁ノ字ヲ用ヒ或ハ苦ノ字ヲ用ヒ或ハ痛ノ字ヲ用ヒ或ハ悩ノ字ヲ用ヒ或ハ怒ノ字ヲ用ヒ或ハ瞋ノ字ヲ用ヒ或ハ恨ノ字ヲ用ヒ或ハ憎ノ字ヲ用ヒ或ハ嫌ノ字ヲ用ヒ或ハ悪ノ字ヲ用ヒ或ハ凶ノ字ヲ用ヒ或ハ禍ノ字ヲ用ヒ或ハ災ノ字ヲ用ヒ或ハ殃ノ字ヲ用ヒ或ハ咎ノ字ヲ用ヒ或ハ罪ノ字ヲ用ヒ或ハ過ノ字ヲ用ヒ或ハ失ノ字ヲ用ヒ或ハ誤ノ字ヲ用ヒ或ハ非ノ字ヲ用ヒ或ハ謬ノ字ヲ用ヒ或ハ邪ノ字ヲ用ヒ或ハ偽ノ字ヲ用ヒ或ハ詐ノ字ヲ用ヒ或ハ欺ノ字ヲ用ヒ或ハ誑ノ字ヲ用ヒ或ハ惑ノ字ヲ用ヒ或ハ乱ノ字ヲ用ヒ或ハ悖ノ字ヲ用ヒ或ハ逆ノ字ヲ用ヒ或ハ戻ノ字ヲ用ヒ或ハ違ノ字ヲ用ヒ或ハ背ノ字ヲ用ヒ或ハ反ノ字ヲ用ヒ或ハ乖ノ字ヲ用ヒ或ハ隙ノ字ヲ用ヒ或ハ間ノ字ヲ用ヒ或ハ隔ノ字ヲ用ヒ或ハ疎ノ字ヲ用ヒ或ハ遠ノ字ヲ用ヒ或ハ去ノ字ヲ用ヒ或ハ違ノ字ヲ用ヒ或ハ別ノ字ヲ用ヒ或ハ離ノ字ヲ用ヒ或ハ断ノ字ヲ用ヒ或ハ絶ノ字ヲ用ヒ或ハ廃ノ字ヲ用ヒ或ハ罷ノ字ヲ用ヒ或ハ已ノ字ヲ用ヒ或ハ止ノ字ヲ用ヒ或ハ息ノ字ヲ用ヒ或ハ休ノ字ヲ用ヒ或ハ楽ノ字ヲ用ヒ或ハ安ノ字ヲ用ヒ或ハ静ノ字ヲ用ヒ或ハ閑ノ字ヲ用ヒ或ハ浄ノ字ヲ用ヒ或ハ清ノ字ヲ用ヒ或ハ廓ノ字ヲ用ヒ或ハ寥ノ字ヲ用ヒ或ハ寂ノ字ヲ用ヒ或ハ鰥ノ字ヲ用ヒ或ハ独ノ字ヲ用ヒ或ハ単ノ字ヲ用ヒ或ハ孤ノ字ヲ用ヒ或ハ寡ノ字ヲ用ヒ或ハ貧ノ字ヲ用ヒ或ハ困ノ字ヲ用ヒ或ハ窮ノ字ヲ用ヒ或ハ空ノ字ヲ用ヒ或ハ虚ノ字ヲ用ヒ或ハ欠ノ字ヲ用ヒ或ハ闕ノ字ヲ用ヒ或ハ乏ノ字ヲ用ヒ或ハ忘ノ字ヲ用ヒ或ハ遺ノ字ヲ用ヒ或ハ失ノ字ヲ用ヒ或ハ喪ノ字ヲ用ヒ或ハ死ノ字ヲ用ヒ或ハ滅ノ字ヲ用ヒ或ハ尽ノ字ヲ用ヒ或ハ没ノ字ヲ用ヒ或ハ亡ノ字ヲ用ヒ或ハ蔑ノ字ヲ用ヒ或ハ微ノ字ヲ用ヒ或ハ靡ノ字ヲ用ヒ或ハ毋ノ字ヲ用ヒ或ハ勿ノ字ヲ用ヒ或ハ莫ノ字ヲ用ヒ或ハ無ノ字ヲ用ヒ或ハ非ノ字ヲ用ヒ或ハ不ノ字ヲ用ヒ或ハ別ノ字ヲ用ヒ或ハ離ノ字ヲ用ヒ

湖にハ面をきらし海をしらし
上をを山山なる物山のしに
を岸にハ物を嫌ふ説面を
きらし海説連にまちくし
湖にハ高粗に成嫌ひて別
乃字を不論山乃海かきにハ
岸とひとし数をのとり筈
とる計にて嫌ひそめしと
見えたり愚成説なり山
の海かな所にも面を嫌しの
かりめあるにより文字を
おこ作り動り句補さへかから
ハ付くもく傍しかく称高粗
ハ称冨士の称にハ三日と同
し吟るるにより気をきら
海猫なり

三日月　連にハ一座一句なれ
とも湖にハ他の季
に今一あるへし三日月の物
非二乗分一丸云志らハ入ハ乗分
あるへし三日月と計ハ乗分
なり三日月の物なるを晩と
思へる人あり非之乗明く物
なり志り被とも鈴呵分の波活
なし物なるとあり其可非二乗分
三日月に同紙付事嫌ひ次

新　一名流に一膳に一新式一
座三句の所に必ひあまし
とも近代ハ新とハ只二句ハ
定と云言抜にも見えたり
湖にハ新一名流に一膳に一代
所にひるの新出の新月の

まゝて雑にハ面を一て嫌ふなり
都名所ハ不嫌

**都鳥** 名所なる都に面を嫌
とあれて雑にハ七句去へし
さて又なりかう都乃字をやはらか
嫌るれて雑にハ物を聞く宮
乃内にも除して文字ハ付かく
物を嫌ふと以へて大かた人の重
たんホにハ如何にも不可嫌られ
憲法の穿鑿するといふ都鳥
と名もなきにあり此物をなく
なる哉 本食 真山上人 語也に
聞くせるに秘しゆへに指合ゆえん
奥義を極めざる海なす事
なるとかれ又名とむかれこうく
せんくゆかりなきによるゆり物名なる



らぬ物なる別ほかならる細
ある事ゝ かの 鵜都鳥 鴨
なくハ離之大事の姉役ある
取寄にあふるゆえと

**宮** 宮神祇に二皇居なり二組
此内一旦ハ名所なるへし
宮法へて裏に一あり 嫌あへ
中宮 無常宮 宮家 上宮太子
宮中 後宮 なくて 殊に讃岐
と聞く と一あまって 此文句之
宮法宮 名所宮 雑宮家之
木ハ皇居之名所也なる物也ん
尾上の宮 皇居の宮も神
になるめく 信まつて 神祇なる
皇居神祇 混乱 多くなる嫌
にハ神祇ふくも皇居にふくも

名所の事二所ニ名有事二
数ハあると讀云宮一所ニ
又句と無邊ノ義ヨ出生ス
旅ー女一事女宮家後乃中将
名乃事ハ非ニ神祇ニ非ニ名所ニ當
人倫ノ定居の事乃二句ハ門
ニ一句まて家居非ニ居所ニ宮
乃字ニ就て二句まてきらう也
数ハ讀時ハ付ても不苦又
猿の事舟やなと當二句
去る也ニ宮前付句嫌也
但前数なとく数ハあり時ハ
付ても不苦人の名ニ云や
わニ云や松なとく云ハ事字の
内ニ事ハ權神祇ニ事ニ往
權現とも云又稲荷ハ八幡とも云

俳句ハ神生數ニあらし次第
又乃門ヲ可

蓑小　笠打越ヲ嫌ニ同云
雨ニ蓑笠付ても
草云笠ハ日ニも人ニ無ニ
もちろん降物ニ付ても不
苦蓑ハ嫌フ物ニ不付なに
降物ニ付ても不苦蓑ハ降
物ニ不付と云く　私云降り
て蓑ハ降物ニ打越とて嫌
但嫌フ物ハぬ雨ニハ付く
もし所ーし次

三字仮名　何ヲ可嫌嫌ニ
ハ七句可去ニ三
字仮名とは云ハ嫌ハすと不嫌
と分別あり不嫌三字かな

海雲 夜しらるめ紙ゆのるやさ
いひくも夜るわ

うりき柏 雲定に云御の字不
嫌と云説如何然れ
二句か又句か二又句に治定せ
屋し以上は不嫌と云ハ調の一
字をうりきと讀と云義か法の
字をもへくかまる柏多し
うりなとか詞小付く吃味す
まれ法字正字し酒をみな
なとゝ云よハかも所屋し酒を
三寸と出か正字に寒時呑之
ハ風寒人かん男を三寸とけく
吹と云よりの名なりけまでも
法慈先出良あまでも法乃字
を付り計嫌ふ屋しうりき

柏とハ大嚢へ拵柏をかせれ
ありて屋うに法の字にきら
もてきか船もたる義りと存候
分但其産の家通次第になる
さるへ者りのし

道とく 三句し

三鴻 ぶり 播州豆列毎國小あわた
に山数にあり次但播列
乃ハ名辺し豆列を名辺にあり
次

汀 みぎハ 二と一ハ名沢なり

みくらう 幣し法乃字に不嫌
丸法らく幣をこて
くらと續にる細まへしと存

と清の字に付句を可嫌歟
幣ハ神の象物にて海します寸
御座し社壇と同しきにと清
神のみくらと云事也されハ神主
乃はなよみくとハのひらくと
おりふ人綺のへしもハさにハおち
をとるまゐ神庭と云事なれ
ともわらめく清乃字をとこす
付る之以義を主に紀まへき共幣を
見るくるをいと計御ゆく清
乃字に玉篇と云へらむ於武つよ
鈞与よ翔と云字付くもらう
しらしき給梅乃门よへならう
付き又不讓筆一と云ら誤思く
同そくらしも清乃字ふハ付句
ときらひくて能歟

帝と云ハ清の字付く
みかと　も不苦に右去法門とも
うけも二句去と云義もあり
毎くにハ門に面をて嫌ひて之
又もいかれと帝乃正字ある
よよ清門と云事ハらん於去と
て字の讀をうらく去句計
たわ根を大裏乃物ある
門戸乃門に嫌しも歟なり
天子をもかくくるり家甚れ
ともをもや天子ハ清名なり
をりさくく従も門戸まんく
う掛く又よ居所の義なり
殊よ帝の字と見るくしと定し
とハ何まん清乃字門まん字より
さすへきまんや既に橋をむの

字二句嫌ふと無言にあるハ
誤り只付句付嫌ひくて殆
なり

御茶の小　行乃字二句さり
なり

みくさき　ミクさき東茂代乃
ミ坂當御乃字ハ

見るれぬ山　ミるまぬ浦る
ゐるれぬ山なれ
いひくハ籠も組句によろ面
しとうく

水に　見くさ　ミクくまいく
みこもり　見し嫌なと
皆三句ハ江ミ所さらハ二
句ハみなきりく三句嫌ふ

ミ川らなのあと小　写し絵
筆文何
まも組む清しかしんかせ
ミミにありけ内名蓋とハ
書物の反筆の美名なり
文字の事ハ反な所に筆文
なれ不可同ことなり写し
絵ハ不著文乃字も悪籠の
文状行筆をとりて出格
小ハ形くゑ物乃むの古文ハ
寶文挑文学者小の類ハ
不著い清まも後句袖すれ

道小　愛路悪路なとの路
ハ二句なり山路なと
乃歩路ハ五句謝りハ三句
むかこちまて清らとり

なとの三文字二
白きるわ
御薪 正月十五日百官こ
とくに薪をなり
良あり
水口まつり 春に黄代にあり
もし
三条にたゞ春にハくれ姫 とハ古
京詞
こ春に成し
みさ山まつり 七月廿七日
こき山かりも
此時のもしかや流くるもひ
まつりし
水ゆき草 姫に天河に多
よあり西説あり

一にハ名 鮮菓一にハ名 無菓
こ先ハ稲なりとこくちりな
世の方にて川に続ける方
をもりく姫とハ思ひ拒るる
なさ俗方おさ分れしハ不可
角
簑虫 雑に好くとなれハ姫に
簑に好をきしゆえ
志
阿母 秋に一冬に一物阿母と
しくも月に結ひて
も冬に来の葉の阿母 川
音の阿母 洞の阿母 皆冬に
霧乃阿母 白姫 阿母乃夜 白
冬 蝶乃蛇の阿母ハ夜 連方

まハ一座二句謝まハ季秋人
高三句下ニ時毎に時乃字
蕃乃字付くも不審謝まハ
時毎に後拾二句去も毎乃類
ハ三句去も

**塩**（しお）　只一焼に一溺（しお）一ツ二ツ謝に
ハ塩噌なとく類にいひくと
一ある人し但類にも後ハ
焼塩（やきしお）　塩雲雀（しおひくり）　塩魚木乃為
に一ツ二ツ見し釣しか久しか
塩満塩干（しおひ）　しか只一の内
塩木塩釜塩屋く　ゑゐる
たとふ汲なと屋くしかの
内し溺を塩海乃もし連にハ
三夕にまりちく一流くもる
なり謝にハ溺をのきく殘

ゑ二夕の塩ハ流れ成とも打を
久く二句もて居云塩乃字
四乃ハ不可寄衣の志ある
ゑ所とハ名迄にもあらん
別の事なれも塩の字に二句
て縁義所り御書に塩をた
ゑ云詞にハ志ありてとも
詞打をて縁又字多くゑ
耳にも居し志ありてハ二句
一へ二入ちしか所とハ又字ゑ
ちれハ付くも不審又志ありて
しなし同りとのしか打言の
志かあひなとも云詞ハ塩乃字
を嫌ひ兼ゑ詞なれも塩に
面をて縁し居去塩田の外
し塩やなハ人倫水魚塩を

座てハ非ニ入偏ニ水鳥ともいへし
焼塩（やきしほ）壺塩 塩魚 塩鳥 汁菜（さい）
乃志ほめなとハ非ニ為 出塩 かれ
小路（こうぢ）小塩山なとハ塩乃字よ
面をも嫌ひ菜の名れ塩屑（えんせう）青（せい）
塩（えん）ホハ数よ續と云へとも味塩よ
是なりさ於よりも付しられる
まても塩よ面を嫌ふ塩田の為
塩梅なとハ塩田句の用られハ同
杉なとて鑑ひ梅乃めんもいと云も
塩梅とも為よ嫌ふやう同為 塩
屋田乃内ひ連よも代居所よ二
句とハ云へとも排よハ新式のとく
不嫌居所屋の字ハあるなら
塩焼 貝汁よ携るもたとへハ
藻塩（さう）燒を火屋と云よ同し

居往乃んなりみ京の所（ふ）り
塩屋も家居と云ふ句練るへ
も居所なれ

鹿一 かの乃こ一もちら二一排よりハ
ろくよ数よ續くと一
ひと字も鹿角（しつの）雑も鹿野（ろくや）字と雑
なり又変し居所も性鹿の字
とされて俗句練縁ホも生類
ホもなり鹿字乃内ひ又鶺鴒の
山鶏乃なれし居所よあら
さりしの統をも用り例なりハ
鹿野字も佛所なれとも
あらさ旁ありし鹿苑（ろくをん）外道
人偏ニ非ニ入獣ニ鹿毛乃馬志
りの皮志りのも筆雑なり
非ニ生類ニりさき鹿の是なれし

杉之又山まゐりせてさと柏木をさ
すもあわ色は雜之をとり
姫しかのこ交なり数として
も交しかを作して雜之趙高
か古夏之干庶 菜ひ乃庶
は二も雜之或は志りをとりかれ
数或は清しかるく如とく
くし為も秋之生数なりは
二句庶四の間之鹿庶 鹿鴻ホ
乃名ホ乃名は四乃外之生数よ
もあら次后芸庶乃字なりは
面を二編か霜踏庶なとく秋之
下りえ 表之下萠と計はさぬ
ゆ庭か色ホの文字を入くとる
なり椎柏は二句ちとも書れ下

萠霜乃下萠も同おし表之
椎柏は二句菓木乃名あらは
りしとわ椎柏は二句火の下
萠は各ホ乃夏之上代の説
くのおとし丸かいたく新
武は下萠と計おしく椎柏
は打越を嫌とあらは野り
原を不入しくも下萠と云
詞表は成と云は嫌りなんは
菜屋らん木屋らん何かれ
差ホもなく表はお紙く
生ある柏乃あるを奥しく
下萠と云詞お来ると見え
あり蛭か原かは限と申ふ
は末世の小物の分別かりつくも
大地をとれ事ちなけまとも

下綱　衣類に志ゝ乃帯と
打をて縫綱の字
打を誓ゝ三あるへし
下綱ゝ名所乃下綱乃
実又てをうやうの衣類に
あらさ所ひもさん三句の内
なわ但下綱とゝ通ゝ下綱の
実花乃下綱ゝなるゝ清ゝ
ゝ三まゝくハ無ゝ無ゝとを
下綱を鞆ゝ下れ帯を非
鞆ゝ紹也乃説なるわ

志ゝ絢　以の内に人をまつ
事に意なり

志のふゝ見ん　浦にハ
名所に
も水鳥にも二句去るなり

ひ絢ゝ云ゝ倩ゝ山志のふまれ
思なとゝ連にもあ連を浦
にハ句縫に名云志のふの浦
とハ不可有ゝやうの名所の
嫗やうを連にハ浦もかゝる
ましさ稱とも志のふを
ゝ里所と今一ゝ云ゝそれも三
句なゝ悪なゝ不可有
又悪草所の志のふなとも
名所乃信ゝとハ文字各ゝ
なれを不可縫但志のふまり
ゝ名所乃志のふ乃里より
おる絢なゝ無草成紋に
ゝわゝ無れを同打に可有
熱ゝ志のふとゝ云絢に和く
ゝまり一ゝ何心なる名所

乃信ま一ハ掛をうくし志のふ
ん一ハ掛に嫗悪をもらん毛佛
法乃悪厚の衣をきらなと
と云数也又一ハ蒿古紙志ふ
を志のふとも云たわ毛ホ悪
かわめ紙よく吟味しく掛
合をハ云伝編ものと

志のふ乃やま寸悪し歌

なとゝ云も同ぶ山数に二句
名和の志のふを信まとう
来り志の姫をなくゝ母志
の姫乃郡云とゝ云句りを
悪草悪悪新乃志のふホを
又も不審志のふをわを大
略を悪乃志のふりしなれ

悪悪に面を編も

志乃姫掲 奥列信ま部
ふくをわらう
絹なれも掛掛にわら次紙
古字をこれも紋にも悪草
とをうによわみくるゝ悪の
ゑとへによめりけ前に志の
姫掲を悪草に打を編れて
連にあまれ誰に八面を可
編もなりら打を無き掛又
に志のふをわの数掛なりと
いへり移画りら寸打式にも
悪草掛えここそ行ま志のふ
をわとハなし悪草悪の字
小面編

あらはれ三の内に

**志ら髮**（が）　述懷に多き意なれ白髮又は髮の
文のかたに傍なるにあらはれ
ある意よりは付く述懷なり
なるに依むに白りとは常
乃述懷に留りて連り
面を嫌とあまたは鄉にハ
七句可止

**志まな**　名も嫌り抱に二句
風体に三句なり
色を嫌きと同しやうに
四ぬく雪と面を嫌ハ誤し
志海さとハ時毎に風乃そひ
ちらはれ雪のそふをハ同
さしまはと云色ゆきつ

あらはれ抱にあらはれ雪と風
とちらり雪を紀ハ時毎
と雪と二句せと三句にみそれ
ハ雪と面と二句まし傍を
いふとまたも志海なれハ時毎に
打を可嫌雪にハ不可嫌雪
し海者とあらはれ三句なり
嫌によくいふ分なをとへし

**志賀**　賀乃名も所迄にあら
を松乃字あれを水
雪も一去汀にある故也

**鴻**　無言抄云鴻ゆくに子鴻
八十鴻なれいひくもある
無りし可け又云伐みまは
鴻ハ一座に一句乃抱の橋
に出て行り又無言抄の器

乃下に鴻一名和に一とお鼓
里志り書これ鄰にハ鴻二名和
に一以上三勾の柄とお宮ら
家へし梅山類水色にきこ
姫鴻ときこれ又鴻ありた
とへば川鴻池乃中鴻屋う
のちいさな鴻ハ水色に汁
にきらひく山類に河ら寸
清瀬鴻えそう鴻瑠球の
鴻ホの國の名ハ大かくも
山類水色にあら寸又國乃
名にあらさ稜とも浮鴻ら
原蓮ヶ鴻室の鴻山類の辺
にあら次田簑乃鴻ハ水辺
汁ゆく山類にあら寸浮鴻
色ハうきし海ヶ原にハあら次

只うきうち鴻ハ松鴻小鴻の
類ハ和山なるにしく山
類の辺海方にきこ姫鴻と
云汁も山類の色なりし茶
の花志海柄鴻もあんしさ鴻
のこち志海乃小袖なとハ山
類にも水色にもあら寸三鴻
海面にあり桜列乃ハ辺ハ
うりゆく山類にもあら寸
白尾鷺 縫尾の鷺とも云
同事ハ表に成るり
表鷺を清ふ時政類尾さ
なを鷺のきこしら寸と云
白服ゆく縫ひへる事あり
こゝ心ハ鷺の心にをのゝ尾
の白さを殘ると見て深山

へいゐるゝ人多かりし志めんゆるの
縁と僕なり
志みん人の山越　芍は薬之今を　悲芸花を結ひ
のくハ悲縁
芍薬　夏之名薬種乃名よ
いふく離之花とるゝく
ともは葉指の心よあらしきは
匂種ありて花の名よ成ぬあ
夏よた陽も見ゑ世よあや
まうく嫗かゝ草のある日本草を云
とく牡丹よ混乱まかり知乃書
ふも管見未だ徳家性君が
万安方本綱之際よかひを薬
と付らゆゑ芍薬と一指を
久をひきと薬と文あるへし

牡丹よハ芍薬対くの本業に
但木なり草は嫗かゝ草木乃和
名なき芍薬ともあらと世よ
うは内なれども木の和名
ふ芍薬と付まハ律編わ
嫗く是種縮まて且種を
匂あかさ指了と嫗くと云まり
とハ本草目綱家横の説草
変ゆかを和名よゐひと草
と云と以前の文説よ芍薬
をおる草と云ハ咲しあか
ちりもあまくはれよ
花のゆく中ら為ゐよ遠
里は寺わらと以て疑旅
かまいまくも志ゆく便種別
梅木の花も三七日よ拘と

やせハ若菜にうつりて夫
日若草と云へ哉いふれなし
そうう草とよめる連歌
見侍らん初てハ雑ニ句目一

**清水**　雑也結ひといへ夏
なれともも夏なり
只水を汲ハ雑也只水を
結ふも汲と同事なるへく
雑也清水結ふ事と定へく
しかし三句嫌清水とある
酒に清き水嫌也打を嫌
性いつれ嫌つハ面と嫌也清
水のみきよしと云字付句
汁嫌也とありに名所の
清水なるハ三句去也きよみ
といへとも三句清水ちかは

きよみと云一字も三句
せいもいちるきよも山類也
成出にハあらし次

**柴戸**（しばのと）　柴庵　柴の庵　柴
垣何れも非植物
居所也趣別　柴薪　植物に
あらさる様見へあらぬ申
く薪成に柴戸と出さるに
ちらくと定よ立る次柴
の庵　柴乃戸　柴垣　柴橋
なとの類也く柴とハ柴
たき火柴焼なと云柴を
よするへし薪にも通じく
せぬとのりかりめある也連に
うつりう柴二句あまへ嫌
まハ句独をとく三句去也

右ニ多ク葉の左枝なし
極柄にたり葉をそれ云
葉にいらるゝ雜木の大木に
あらさる代云山葉なし葉
下葉その小枝なくいふ句を
皆極柄成也

志なり　道のあるへに葉木
乃枝を折かけて
玉ゆゑ非ニ極柄ニ乃と山行
なとの路文字なり二句ゆゑ
ありく道にはあらぬ法ゆゑ
乃なりとは付くも不苦語も
文同し法行なるとはいふも
不論

述懷尺數之詞為二句一

時志て付歌數事也
以上新式の語も此論やうは
なるとは昔古なるとは述懷の
詞なれとも如し仏をむすし
ゆくなるとは三句は尺數ニ
計論く述懷にはいふ不論と
云事也但うち又世をはおく
いわるんの里乃乃なるとは云
句は述懷にも尺數にも成也
いかに新式にありとても依
句種もし一概(カイ)にして不論
述懷とくに三句也

雲下志くる里　新式に山の
滴新乃雲下
非ニ落柄ニと行りとを千代思ひ

宗道姉り掴り苔乃類と不
入一句無らくなるよしとゝ人
里ひ義不宜山ハ不及中
古きち社の檜皮の軒ハ
宗下不斷をつゝ而多くなる人
しも古人也愛惠をことくハ
淺ましき事ハ約多に宗下滴
連雛をよ折を一嫌宗下に宮
乃志ゝ里折を嫌雛ハ面
なわ来くの宗下軒乃宗下淫
掴ハあらず

宿

一座二句の掴ゝいろく思
かりぬあり宿而居而
なり又也上也乃法宿而
も同お猿宿池田乃宿鏡
乃宿皆同お宿者人倫之

者人也もしられた句ハよりて
迷懷之又町方ハ年をなら
孫とも町の宿をとくあり
迷懷ハなし次居而ハなし次
友と同宿しくゝ云句ハ非
人倫居而計之寺方乃同
宿人倫之尺数之居而ハ不
嫌宿場非居而非人倫
尺数なり宿食類乃名之
非居而宿業居而あらず
而尺数宿室居而ハも
尺数ハもあらず宿世同お
辰宿廿八宿々曜師人倫
毛木ハ星の嶋なり非居
而何也折り花お鑄りし一
座ハ二句なり

椎しゐ　紅葉せぬ木なれハ冬ニ
実取ニ名をとりてあり
りふ木なれと椎と計も雑
し実も葉も花も雑し

しげミ

　繁り　原り　山りの
　是も不及云ハ
只茂りくといふ草木纔ヘ
云ハ雑実と茂りしげり
因ある無きをの新
前ハ連歌ニしげミとて
くり志けり句も多く纔り
色ひろまりニあり次木字
のしげみな本とのこと文字と
てまをハの如りとあきとみ
乃ゆよゆるよりくも繁をと
直しくハ湘ハさまれあり次



義なる見よりと云ハなれり
荒蔵と云ニ同じ野山等ヘ
てもやとさ様飼し雑なり
植物ニ二句と又前りと計も
ませしきハ夜になり同
夜又志げりいふハいはれ
も野山草木の文字とて
へ称とも志げりと計しを
こめり古人ハ連歌ある所
色も植物ニ二句と当世雑
歌の志げりなとしといふハ夜ニ
なるへし、すは植物只繁
間の心ちりてこ葉のしげ
まなとあらそ夜ニ成るく
植物ニ二句続ありしとも
なくハ夜ニ不成なきと

なり

鴨 鴨なり物ゝ好しきのゝ志
なとゝいひくも好し





祇園清水傘

繪

繪ゆかく草木 依名 物ニ可 聞ニ其ハ愛

ひ新式乃ゆゑ絵よりまつ
草木ハ種物よりなるゆゑ
愛をもとゝ物ゆゑいふ事也
二句去屋しといふ人あれ
も古人を絵をもゆゑなり
雅とりく種物にせきなり
よ紀道理なくねらくとの
も新書絵なりも其紀葉
乃絵なりも姫乃愛と知

あり絶難之

清川村　右まへことを書て　右の字八ッにまよます
官ちれしん人々備よ
あるす

恵比須　西宮の神乃御事し　福神なれは
神機ゐわとり人とも西八句
乃内ままも御しかりハ以夷
秋乃恵ひすもやハ名あれ
も付くなも御しかりしれ

恵乃木　雛し恵乃実ハ猫之　とえくゐうの木
乃実ハ猫様なり

江

氷室　あもし氷室として一座
一句し氷室とも作く
にもひようと数まて続く
も雪なりも七句去るて
うぞしひあるひ氷まは
ひさらふ暖かるの事をれを
西か庵をきし句神なる人
物をちへく一唯二句去る也
昔家のお宝も四月朔日
これ九月をまとく献する
頃なり稀あり六月一日と行幸
と国取り夜乃去まて
氷室所善もしひのため
其氷室と物を極る
元日小ある事もひむろ
乃雪も去るし

檜原(ひむら) ゑし一誹諧なりとて
ひのきの木をいふ檜(ひの)
木檜柳檜なとさ檜 檜垣(ひかき)
なとく今一きへし 並檜
あるく釣のよひとくも二の
内名ハ檜のく夜川かと
名所にある檜の字を二
つの外ほり

日くらし 誹諧一座一句の
物にて文字も多
よ出れはかも釣もかり
あれとも粘む蝉と同訓
たる種を蝉とハ連のごとく
誹にも物なれ蝉が續く白
ゝしとちゝくと一句
連にハ詠まれて誹ハなれ

蜩(けいこ)と釣ハよつのく以上三
句まて入り詰れとふかく

ひさ 秋之橋乃あるよあめらす
日ハ植物より二句去り
一座一句乃物なれとも誹諧
而ハ二句あり引出字まて三
句様乃字まても同名なまて
物より田家也ひのくハ植物よ
二句とあわ隔てなたること
ひきわく雛乃田なりなすそ
ひきとさふるかあまさるのし

姫(ひめ) 連歌ニ二誹諧ニハ姫松
姫瓜なとの人倫にあら
ぬ姫今一あり但し姫さ
御姫ぬ田姫ほも人倫なり
あらん句も人倫乃沙汰なし

とハ春の日夏乃日秋なる日
冬日永日遅日あつき日
さむき日くるゝ日に数日を
えらみよき日あしき日月
日々月々日誂讃まで西九日
寅乃日乃叙縁日神乃吉小
魚日毎日冬日打やの日
秋乃日ばかりの日影とし月星
なとハ二句去し朝日夕日
朝附日夕附日なと入日日の
くまく日乃影かくり日
も日の気日乃さす日のひら
またうつる日でる日くてりも
て日の事しハ天子の崩
清をもしなし天子かし表儀
し不吉乃詞すれともさしきれ

きぬ事しも何日さわりある
日も実なら日のやうまで立つを
月日家乱をさせ何合紀星
乃日ハ日次月次乃日にあり
きなは月星本の天像り
三句去し継詠ま本あまりも二句
まり一夜しつてさま字
連もとるかてがまいて
書歌をのし

日に盆 清事ともに何うし凡絶句補り

よ何あし

日乃字に いつか此の字ある不亀をとく
ひ一此る明ら今日明かなと
能よりへも日まで三句去し

晃乃字　月日星ホ一晃霊
はまに一光ありてさ
皇の三句乃稲し　雅よれハ今一
くらうしも字のよ讀く皇の霊
いにしへよも紀をうるとひかり
ともわりホ日乃事にるりと
毛も皇乃内し天像よ二句
始まる文ろうと数のよしも
二あるもしのことにむひかり一
為り次為り前の世


久字　久乃字乃の字皇の
ま文天毛ホにし二句
まし九云うのの字めくハ前
とも黒とも去りゆり久字め
ましさの字ハ久字まりけ
るれも久しまよと云詞ろしれ
もまとも去ふさ欽まる紀ハ
久しうさし光字しても応ハ
くはりと始をらハ皆乃文字皆
遠よ一唯二句乃稲し久しき
も思くも紀わくハまる一
数さの氏紀欽武よりも久ね
稲合るもる唯の字通
深ホりしくどうむ為しれ

平野祭　四月上申日に孫津
来乃平野皇れあらり
ホあり仁徳皇いまる為く
また源氏平氏高階氏大
江氏等の祖神し

歎　歎たらり神猿うちりまれ
乃もつ座よ一句あ稀し
雅よく皇も久しく二句ま退

まゝ所をたゞくへくいへる詞を
和にして一葉の和とつゝ一葉
乃るわ身に似たりといふ
なまゝ藤の心なるし
新式乃心をふ意しく文を
かりを悔しく藤をと注とる
ハ淺智のたゞ和を連りしハ
ともあまゝ洮に藤りし嫌へ
うゝ和と漢との差なまゝ
えるまゝさゝめうに文のことく
嫌たゞ嫌乃字も漢に藤に
なほとゝ和に嫌と云
詞を藤に見ぬとよくく
あるのあるへし

一夜 ともかりハ洮に人数こゝりも
なしあらハ名数し

一村 居所の心なるべく作乃一
村なせ文をへし洮に
村をへく一村とあるによむ
句今一あるなり

一文字 連に面に一清あれハ
洮にハ数によりかゝく
もよこに續くも七句去に
まへし余の数字ハ連りに
あれを洮にハ数によりても
よこにふにかゝくも一産に文字
乃抽を新式に一文字とこの
数字との文字を定りしね
かゝる細をくりしくかまゝ
多所言文章をえらし注く
無言抄にあしく注をら被
あり不入義なれを多り

しるき次

ひくもことり　ひくさもとら
　　歌り　歌し
されは平源（ちきゝん）とりをは居所に
二句去し

ひろふかひるき　なとに生数
　　二句嫌しられ
もあ鳥にも二句嫌し

雛（ひる）　ひいるともいふ鳥れ名も
同しく又なしられ物を
へく雛には二句ましし又田
舎をひるともいふひるの数
ひるの家（うれ）ひる人あまはりる
ひるともよめりあまして人
形乃ひるかしも鳥のひる
まもめくもきらはしと見は

乃ひる連に一句あれは二
句まへし又ひる男とは
いうけしなるちいされひるの
屋うれる男をいへは人形
乃ひるるしくはまへからさ
る歌但連りしひいるあれ
も雛にはひるとひいると
一ゆと二句まへし鳥乃ひ
るはひあし鳥乃ひるも連
に一あれは雛には二あるへき
歌丸おもへらく人形乃ひ
るあれひる田舎をいふひる
皆名なるからい清まれ
二句清くあらは六句のひる
耳ふるあちくかしう海し
るあるしさやうれ事は

まゝ両しくれも若六句を
おゝ家会あらはれ作れり
なりく見換へなく義も
左云連は一句乃柄も誂は
二句も傍物なるれも法度
を屋ふる理もなる紀あ也
もりはまゝ勢兼く制を
へなく事にあらは

ひやくの　初秋乃事なり
等級はいかれは

ひゆゝ就やく　なるのことも
ひやくかと記
なし冷の字を始なり

ひこもへ　なにまゝ草ゝ
てしも表はなり
なり

廣瀬誇曰す法り　四月四日なり
和劍はあり名と風なの
雅を新結ふ神も

日よしす法り　四月中の申日も

ひと和酒　なるも和かはれ
あらは和乃字
二句嫌も醍乃字を出敬も
あす酒ともよめはあす酒も
なるも六月朔も七月所
まゝく日毎はなりこゝろ
招元はあり

ゆゝ魚　みくちりあしろ
あくと傍魚も

百歳に一ゝたらぬ百とまへし
それも和かをみに侍るべく
まへし初わかよ百歳とわら
も二まん和かハもへかしきろし
百歳ゝハ百宮乃ゐの消唯
と歳ゟ伸ゝとふるべし

# 求子

神祇ふく事なれ
も神祇ちの神ふ乃
名をふ流あれ共深秘
の神ふの神歌ふ奉納ふと
まをんくハ源氏乃注ぶまう
て実ハ歳乃かく哉詠ふし
にまとゝ申をハおかしくもなよ
もかくハを於りて舞とおぼし
とゝ舞をぞ出なく
まへしいか

新式挑ちよハ此名ふ唐寮
漢鈞るとぞ今きまへしるく
ゐるゐくらう哉りうさかゝる
てうこゑ此のうへ乃字ハ和よ
一流くまへしを係あしにう
ゐハ和を繙ゐ乃名ゐるて
かうと斗ハ面をときるふ合き
るり

# 藻乃花

あきし繙海のきに
もあゝす

# 森

毎一名流よ起挑よハ
た森とちゝわ家しも
名所よ版を今きうへらくしと
三ゝ此か又大森乃森也と
林るとの人かん名のきう出名
此三乃角と又鯨をと流くまう

口ゑゐくりえ語乃都同家

**柏のひとゝり** を年第経の
ゑすをいゐり
繼ぎのいまゝ志ゝ決

**文字に** 第ゆゑ婦ゑ桃ゑしハ
連ゑのよおぬ書物
なとも第ゑ子に准しく可
疑之歟

**もゝ和次** 連にゑくハ耳ゑ
ゑ同様へ二ツより
といへり桃にくハ文に耳に
もゑゑさ桃をいくつ何もまゝ
為ゑれと連に一ある柏ハ二ツ
二ある柏ハ三とゝ定まゝて三ある
為さゝ催促と知ゑよ母ゝ
附ハ今一ありゝ以上四ゑへし

**百手馬** じゑくゑとりけるす
ハ古今集此三首
乃中にゑく秘傳ある事ゑ
連に其の事ゑ定ゑくを
ゑゑくむねゑし語しゑくゑ
乃為といふもゝ此ゑ清ゑさなく
ハ其になるへゝさ傳ゑこの
道理明るれをもゝ此ゑさ
まゝりゑれともおゝくしく
もくゆさ稱ゑるゑゑす
にくゆまく容易もものゝ

**皇月弱** 八月廿三日 經濟
皇月といふ所ゑり
生傳御馬ゑ要之乃本や
ひくゝん乃ゑのを不相傳ゑる
人ハ十又日に弱連ハ限ると

しかしかやうの鼻れさなる
ゆゑ不審をもちぬくさはあ
学我自見しくあ人と思
ひ推量ふくはぬるる
多く御ひ

藻に住むし　雑しあるを
なり

## 蟬

蟬　ゑゑ一雑にはこれ二ちゑ
蟬と云ふ蟬といひ人稱を
く御かくは蟬くたまる
但文字ゑゑ仕れも云蟬く
とはあるへくはひ所に人
乃名也蟬丸蟬ゑ丸蟬源
成字蟬笛乃名也蟬とれ
蟬娟ゑ御蟬笛も蟬
二乃門成ひ蟪蛄も蟬と
なし蟬二乃門し

蟬に日晩　打を嫌へも雑
にはゑゑ義なりやうの
一座に二句三句の所はなき
む稲を雑にも打を去り能
なり

哭　ゑゑ老名所にし一意文
去様をとむる門にし
以上三に雑語にはひ所にし
哭東なと御本讀く今一
ちへしからの函谷哭湯
哭なともはひ門兼ひ四の
哭は皆打を居し関とあり

乃条りもとくさゆく從家
也へし付て作親し植ものとし
居所し同の初とさ薦りと
るとて云もは肉ぬ句薦
ちるも付てるてハ各とし

**梢**

挑落りハ一唯二句去へし
住乃字りハ二句去ハ
三句隔去山家なしかゆく
いふりハ其句去てもとり云
字一字あるに居し居所り
二句去り

**梢**

草梅さおの句りも初庭
垣なとの法りさ居所去
詞いわくハ挑よ三句去て
ども此ハらの字なとい所居所
り二句の梢されても云事とき

梢乃句り其他のことも居
所り二句去し

**住居**（すまゐ）　是も一座よ二句去也
居所りハ二句去て住の
字りも居乃字りも二句
法くさへし梢と住居とを
嫌へさるゆへ衲と越州
なる詞なれて而をさへくて月
風し鵜なきむとさもて
ぬるとさもわもる句去居
所りあるす

**去嫌**（さりきらひ）　二句去て次
きらすの数なり
ふらうものしの事て

**捨乃字**（すての字）　字去てもつるに
もくるハ鍛也

り案も二句きしよきて人
案(きうれん)にとりけれ毛も拵の字
に二句人かも二句に人編し

**身を拵りに世を拵り時は**

拵打を始し連にハ打なれは
洮りしハ面ちりをきるさ
なれとも身を拵りも世を
拵りも同様乃句なれは
打なし打に雲にくなれは
ひかみを拵り歩をもつる
室をもつるなとくいふ句
も連懐なとも世を拵り
身を拵りの捨乃字に清打
をきへし連懐なとも付ハ
二句ハ

**次戸** 郡乃名なれとも郡
亀也次戸のよ鑿
ハ非水辺

**硯水** 水亀とりあらなか
硯連に一あれは洮に
ハ硯屏又名和の硯海なと
とくと一ちへし硯乃字
清ら称とも松法志画ひん
きさなと東名乃硯に打
をきしなるし名和岩
硯海にハ面ちりをふる
歩の欠

**珍麻海** 山鄰りあらなか
珍麻乃異同なか
珍麻とちりも郡乃名な
きれ山鄰にあらなの

字庚乃字なりしハ字ハ如へ
多稱と稱の字ハむ又字
なれは同し面を嫌ふへなし
し庚乃字ハ字ハ字ハ字ハ
又女庚乃名れ稱庚と名
而乃稱庚ハ名なるなれは
又字もおきても同し様
なれは物を嫌へなん

**炭やき** 名ハ炭と計
もあれ炭竈
ハ山類ハ炭やきハ山類なり
あらん人編ハ炭乃字ハ
連ハ言之事ハ文能ハ
炭とはかり一ハ海炭
燒乃用なり又ハ炭なと
と鍛ハ今一ハ

物をかへてこれハし視
乃ハ眉をとつ書ハ
墨ハ二句ハ書しれ
も墨ハ絵ハ墨之なく数
ハよりたる句なれは付く
もらはしらん

**巣** 書ハ古巣もおなし
水鳥ハ巣ハ鳥ハ鶴
乃巣鶴の巣ハ雜ハ鉢
のを蜂乃ハも雜ハ巣の
字ハ鳥虫の名をくへく
一坐なし三句ハ
次ニ乃沽稜 書ハ己乃日
乃ハ人同し
次ニ乃ハ源氏ハ
ハ御詞ハ書ハ

なし形式に不当因とする後と
あれは今は雑し

**松樸** 秋はあとの後とらふ
清ひ乃字の後に書の
字にあらんかりし濁へから
と内裏にて七月乃下旬
にあらず事し

**とさ海しき** すこ寿ん君
句も秋に句
後にはしき連に二あれも
詞なるに終にいひく
三句もへし冷泉浣冷泉
町なるにはとさ海し寿とも云
いふ三句去るし雲なる也
不持ゆへ[illegible]
[illegible]

**簾** 居にて連りし春
後にはしき絢簾とあれ
浮女簾清簾又簾中
なるに終に後にいふ二も
あれこめくとりふ詞も簾
乃類に又句隔くもへし
ぬこ次ものとなる簾り
二句去るし

**枚乃宮** 居にて拙拙にな
親も連に枚さ
ん乃枚とかふ二句あれも
後にはしきり枚乃若あや
枚もきき重若に乃内以上
枚をくへく三句もへし
母乃名の枚原はらへ物り
あらず枚竹枚打雲枚着

枚揚枝枚乃庚皆同お枚
陳る同お絵居ゆえ毛ホ
も枚之乃内え同ニ松枚と
いひくわるし　やうるり末を
松ハ七句去ゆく枚をハ一
座ホ二句乃拖と定ハいりん
昔云新式ハ　そ河清るし
といへども枚乃句ハ連ゑ乃
時年ホ松よりハちゑ家ニ浮
乃宗通をせうやうホ松定ゑ
袖を跳りしも　そ分ゆしく
至るり

## 菅笠

拖拖ゆあらす菅
簑同お連りハ
いろ同ゆりとも新式ゆまりん
えり跳ホハ菅ハ一菅ハ菅

簑菅蓑菅笠遊るりの花
ハ一ひとりハ菅原氏或ハ
菅家とも或菅大神とも
今一ゆをかへゝゆとこまる
為し毛ホも拖拖りあらん
又氏なして菅原や然りん
るゝあるもこ乃内え毛も
名所なる袖を拖拖ゆあら
もの名流氏ホあらす　しく
菅原とたりハ拖拖えうへ
拖乃菅一ゑうへこの菅
原をへりしす菅水色ニ
あらす

## 末乃松山

奥列乃名所え
拖拖山新え末乃
松とたりゆえくも山新え

下しすゑてよみて終句に定
まりしすゑの声よハ二句嫌へ
し未声なれハかも嫌ハ〻す

**水鳥と水辺** 三句去し

**例** 二合こハ名所ならハ五句へし
生所のこと似のまハ七句
去し

**住吉乃神** 名所と水鳥と
らハ清らをとるを
いひくハ名所よあり寸以上
垂そ乃浜乃境く名所
あらさまハ名所に近きもよ
すも新式の名所神祇名所
ともふ六義しくらひ給へ
くらす

**鏡乃海** しかるに名所乃ん名
乃あたる所の人より名所よ
三句嫌へし其江乃海の也よ
らとるしハ浮ぶも同し耶
こハ亦るも名所よも皆云
去し

**黒ふ字** 連すしハ
二季しきゆ
むくしと移と逢て年も由とと
こ一るて物騒ぐ乃山よるし
今一句まてしま由そとこと
時ハ黒ふ移る也嫌まで袋をの
山ゐし数よ續句ハとその
字なり移るくとさしぬ
なり

慶安四暦初秋
三條通菱屋町
林甚右衛門板

鷲亭金外藏書